



武江年表

一

伊
760
1



門 伊
號 760
卷 1



武江羊表序

龍泉大阿之塵

蔚紫氣乘騰誇斗牛之間其

威靈如此而終出於石函且

雌雄似雜以何頭悔其

聊！在哉隆然其至復亦

匹於延平之津則其我可知



武江羊表

江戶書鋪

青藜閣



矣。其害一可益見矣。由是觀之。嚮
似可怪者。即足泉阿之威
靈。取以傳于萬古。而不磨滅。而
顯悔之取。關係為害大矣。豈翅
多。何凡物之有匹。自有其
數存焉。何桑受其失。得哉。
友人齋藤月峯。寄職之語。

著書者千種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為事也。自慶元。韓韃
迄于今日。大之。天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之。少

人之生率神佛之啓合龍及
風謔似談珠玩戲具。經羅
不遺攬。按尤効。凡二百年未
之事。談一。性一來。隨求隨
在。族老受其易。終而更無
繼。豈無繼哉。事勢缺。掌操
觚不苟。退待來日耳。其至

如象阿復。匹。至。鱗。挂。沙。彩
光射波。見。生。美。可。全。見。矣。
其功可念。知矣。然。別。此。編
之。雄。鳴。以。待。來。日。者。亦。取。以
地。雌。雄。相。匹。傳。于。萬。古。而
不。朽。也。與。其。何。憂。之。有。須
日。剝。剝。旋。工。發。兌。卜。吉。仍。舊

貫乞為。朱亦不敢。辭便題
茲辭。以為延。平前。之奇。云
素。永。二。年。屠。雖。心。聖。三。月
上。游。

前山陣人源瑜



七十若戰驅親鯨。依扇藍
輿教太平。宮朝貶孫謀臣列
國日光高照海東城
試神劍羅。并收權二百年
間不動兵。官家今日真無

祀 頒細の事ありし編せり

○忠臣孝士貞婦烈女の勲恩賞を賜りしもの枚畧すし違ありし姑く新編し服せり

○新古書密伝類の作其代有名の書没率の年月代の書目見えたる所をのりしを志す貴人ら子に傳りて多し編ぬ世永決の儔もまこと遺漏ありし一凡世編し編るる代永約し流るる人抄を者種本等し月後編老種好々藝助一覽古書代の思ひより日本の書をか令知下

○東武の人著し所の新編の書ハ牛小汗一掃り充へく々類く祀し月以爲規ありしをまじりて事流名所ありしもの二を撰りし編上本の年序をよるし

○世の風俗を知りし人ありしを世見ゆる書類集事流名所ありし者く抄録塵塚流澤海之話言我衣袋の然際流石青抄流城遊笑賢陽の系光骨書重集等の冊子ありしを新しを撰りて記せし

○文化中編輯せる大凡書類と題せる書中一書あり此共、本は此のふ洋大凡新編の終

裁し有るは是を裁す所要ありし完備の物ありし余の撰も又兼編ありし中歩下歩の撰りるを以て再び書しし音流俗語乃教近載りし中も信るし抄りるを以て要とされし巻帳流紙ありし事を撰りてありし有けり

○余固より浅見ありしを以て杜撰ありしは是を訂正し参考し識者の吹言定を以て精微を以てせん其裁許の事を以て余の類ありしを以て事を以て書房の求るしを以て草稿の流庸書し要割削し流しし類書し小書し庶幾大方の君子遺脱を補し流漢を以てありし事を以て永新元成申霜月吉旦

京都神田郡人 永新元成申霜月吉旦



御入國の後不日尔河津の鹽を江戸へ運送の爲彼地より船の通達を
妨_たげぬ事_事是今の河津橋の廻りありと_りり
天文より元龜のころ河津のり小田原
橋の年貢を納_り河津地には碑_もあり

○八月平河天満宮 津城内梅林坂より 津城の北平河江_江移さる

○夏海勢の多布せり_り若狭龍橋の辺_邊
北時_{北時}末_末 小幡湯風呂_{湯風呂}一_一を_を立_立る

風呂鏡永樂一_一族あり皆人_人移_移り_りた_たと_と入_入る
考_考長見安_{長見安}

○四満山廣津寺 今_今下_下岩_岩 小田原より_りが今年_年小田原滅亡の後江戸へ
此_此時の_時佐_佐持_持を_を希_希豊_豊和_和尚_尚と_とい_いは_は後_後
津田_{津田}移_移り_りま_まり_り後_後實_實中_中今_今の

移_移り_り今_今の_の昌_昌年_年橋_橋の_の沼_沼地_地を_を軍_軍庫_庫を_を營_營む

○天正の頂軍_{頂軍}東_東小_小乱_乱波_波風_風間_間と_とり_り強_強盜_盜あり_り黨_黨を_を結_結び_び陣_陣中_中に_に

忍_忍び_び入_入て_て盜_盜を_を多_多し_し徳_徳人_人也_也と_とり_り今_今年_年と_とり_り河_河を_を入_入り_り逃_逃退_退て_てと_とり_り

絶_絶つ_つり
水_水原_原五_五代_代記_記

天正十九年 辛卯 正月 閏

正月 冥八州の徳家_{徳家}家_家首_首の津_津安_安と_とり_り多_多始_始て_て登_登 城_城あり_りと_と云_云

○十一月 軍_軍東_東津_津社_社小_小津_津寄_寄附_附願_願の津_津朱_朱平_平を_をあ_あら_らす ○赤_赤坂_坂一_一木_木町_町屋_屋を_を

○十二月 軍_軍八_八州_州通_通用_用の_のさ_さめ_め小_小大_大判_判小_小刺_刺を_を造_造り_りぬ_ぬ は_は時_時代_代浪_浪一_一枚_枚九_九合_合
ま_まあ_あら_らす_すと_とり_り

○小田原の靈鳳山_{靈鳳山}種_種津_津寺_寺今_今年_年後_後赤_赤坂_坂一_一木_木へ_へ移_移る

文禄元年 壬辰 十二月 八日 改元

津城の西北の地大法書組_{大法書組}宛_宛宅_宅地_地を_をあ_あら_らす_す六_六組_組小_小分_分あ_あら_らす_す一_一番_番と_とり_り

六_六番_番ま_まる_るの_の名_名目_目あり
是_是より_{より}昔_昔町_町

○田原山_{田原山}折_折頼_頼と_と天_天正_正十八_{十八}年_年小_小田_田原_原と_とり_り河_河を_を入_入り_りぬ_ぬ 今_今年_年

本_本館_館町_町の_の地_地寺_寺院_院を_をあ_あら_らす
崇_崇長_長元_元年_年又_又順_順田_田町_町へ_へ移_移さ_さる_る明_明磨_磨の_の災_災後_後津_津原_原へ_へ
移_移さ_さる_ると_とり_りの_の名_名目_目あり_りは_は河_河を_を入_入り_りぬ_ぬと_とり_りす

波_波地_地の高_高農_農も_も次_次子_子は_は河_河を_を入_入り_りぬ_ぬ 昔_昔年_年頃_頃津_津原_原の_の屋_屋敷_敷人_人在_在河_河を_を入_入り_りぬ_ぬと_とり_りす

一_一共_共の_の子_子あり_り父_父果_果て_て後_後小_小田_田原_原を_をあ_あら_らす_す 以_以年_年十_十又_又大_大あり_り一_一家_家味_味の_のめ_め抱_抱
あ_あら_らす_す河_河を_を入_入り_りぬ_ぬの_の名_名目_目あり_りは_は河_河を_を入_入り_りぬ_ぬと_とり_りす

友許を以て廓をひらけり尚え和の件小あつせり又小田原の豪家松田吉右衛門
友嘉明人小又靈番といふ服某の方を授りしが如家友を以て後江戸小あつ
本町に丁目小あつて波某と佳し小大小あつ
ありてはる今ハ化人のあつり製せり

文禄二年癸巳 九月間

天正十八年の後島川へ寺地をのちり一日照山法師毎山英養今年

道三河屋へ移天和三年津川 ○惺窩先生蕨歟始て江戸へ移族寓の室

我有今の地へ移 台命を得て貞観政要を漢文一冊四景我有解の文を中編へ

取りて東算の遊くま たりあつてもうやとあをゆりゆむ秋の月の東海の小つ

○天正の頃常陸國江戸崎ゆり小あつ徳忌一羽と云兵法の名人

あり土子泥どうまひお岩間小徳根岩菟角と云て必を得えつる女子二人あり

徳忌病の時菟角の病人を見捨て逐電ちん江戸へ来て徹摩みだ流と

名付一派を起して男子多く随へ上見ぬせ徳忌の勢ひを以て一羽と

二年と云病死して友人の男子菟角が事を出して孫情いまいりぬ

人の内江戸へゆりて菟角を討うべと後一き電をとりて小徳小あつり

う小徳江戸へ移りて文禄二年九月十五日日本橋ありて菟角小あつ

より官府より此事を聞き刀根岩を預り木刀の仕合しあひをゆりぬ

より友人木刀を持て立合りて菟角打肩うてゆりて逐電ちんして

行方を知らぬとぞ以上如家代記の文を畧し中尾菟角編の文を小あつり

同三年甲午 八幡宮の額小菟角と名書し家ありと記せり今ハ元ハ

九月千坂大橋を始て掛くり

橋板ありぬあつて橋板倒して船中の人小あつ小徳小あつ

移りて後光 ○今年米穀豊饒あり

○小田原不老山壽松院今年尚地小振させしれ今の賑治橋の向ふ
と流をぬるる後年神田柳原の辺へ移り又後年へ移る

文禄二年乙未

武蔵小判成光次と奉書以武蔵と ○小田原當知山本誓寺江戸小振

あひ日以ひがや谷掘所町の辺へ地をぬるる後了喰町の辺へ移り天和二年

の後の地へ移る ○又長見波集云舟町と日市のあひふちひ

さた橋只一ッあり是ハせうや渡の橋あり文禄二年夏のあひふ橋のり

あひのせふがわ渡を橋をぬるる水糸跡もあひてあり

官府へさへあひてあひては橋を渡瓶橋といふとありあひては船町

兼日市町ハ今の残りぬ橋のあひては舟一橋あり

慶長元年丙申 七月閏 土月二十七日改元

一歩并小判金始て通用昔は金 ○六月十二日系原盛内昇東法皇大

薨又水毛隆毛長井 ○閏七月初鮮人來渡 ○同十二日大地震月と途々

止む ○波河臺を築る ○多田宗玄といふ人靈告を告りて系原

東山の辺より某所像を拵りり奉庄ふ安ん今多田の某所あり

○税町常仙寺とくや宿基宮某所を安ん

同二年丁酉

邪よこ田不老山感應寺宿剎昇山日感上人あり此寺地不詳然七年

同三年戊戌

松平為頼と駿州より江戸波河臺の下へ橋後寛永十三年

○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる是ころ今のヨリス

此時正造堂有... 車孫金考云此本堂の惣棟模の由也

○大城所普徳子付柙町の了場所用比あり其の辺の遊女屋とも元徳

預ち前へつる○此時代進く小道橋多あり武家藩邸後移す

○南宮とりのタバコ蓄積を渡り長崎より梅子切りめてタバコを裁り

一説天正中商人
持渡りしりか
享徳十一年 丙午

大城を築たぬふ二月より始り九月ふ成終あり 此の時惣棟模の邊に把渡す

自ら吳振のお立しき書改 大石を裁りて其浦よりひらく時

○選置一清書異物とも揚る彼山の使も其末 六十年

○六十六別竹実を結て枯る○本は思清と三河橋新渡河巻より後

○十二月八日永樂銭法停止 此の時

享徳十二年

小室氏康の時冥本中永樂銭を用ふと令せられびて幾上方より天下は
一統となり二銭充定て用ふあらむとも永樂一銭のりたりふびに足銭を減てきし是も
おのて其意をえりひひ万民安うはとて今年永樂を止むひ一申中永樂代記あり
或記云永樂一銭又合きまむと定ぬ合ふりあり此の百錢一銭は除きて足銭は合ふ
而も小永樂の年貢ありは此の遺風ありびて百錢小幣を裁

同十二年 丁未 二月間

二月十二日より十六日まで 市城の邊を親世金春勅進能具行あり

同廿日同前ありあまの雲の神子も國勅進奇舞妓具行あり

○烟草徳州へ引まる上中より其を裁り 同前又徳州からあまの雲の神子も國勅進奇舞妓具行あり

○通清園白伝平公清中向ありは時梅若るをよ母と改めひ歌をぬか

あまの雲の神子も國勅進奇舞妓具行あり

慶長十七年壬子

十月四

亞馬港即亞あまがうらとてあて奉書元和七年と新傳西把弥亞始々奉書其のち
あ〜○七月廿二日大敵降○大寺造を傍義同於殊せ〜
の為掌あわらあり

同十八年 癸丑

漢又刺亞始々奉書○六月七日神田社地々を南傳了町始々津旅お
あり○九月千葉家後統国分存を傍心務とり人先祖お傳乃捺拍を
本海並々寄進を○十二月耶藤宗の老淺宗お終々殊せ〜

○津塗勾崎甚固同取小殊せ〜
今も甚固橋とりの八月十二日を今もまつり
あり

同十九年 甲寅

那波道圓ななみちまゝ 姫路毒野高
先世の門人之

父小隨つ〜始々江戸〜

此所廿七あり廿九の所把州
後の指きあり把州〜

手後殺交江戸〜

○八月廿八日未刻大風増上寺山門折々於山門倒置
波迄の坊々あり

人家撮を赤川九品を不重の塔倒置〜安二丙寅年滅就せ〜

百六十九年を経〜滅せ〜

〜のり〜

塔あり〜修〜これ同士の坊あり不〜とてのむり〜

○九月南蠻人阿素泥人東朝あそぢにん 此の時ありヤニヤウスふあり〜地取ヤヨ
あり尚考下

○十月考長見史集滅官奉十冊
編者三浦清人の史集家よは〜

○十月考長見史集滅官奉十冊
編者三浦清人の史集家よは〜

○十月考長見史集滅官奉十冊
編者三浦清人の史集家よは〜

○十月考長見史集滅官奉十冊
編者三浦清人の史集家よは〜

伊集川記事

左記を西路の六堂書院長伊集川を抄録也

江戸町に川多あり一と皆皆川あり 河城の塔をめぐり日本橋へ
流るる川は一筋本川ありあつる小川より山王山神田山神の氏子雲南
と山王権現の氏子あり

江戸よりあつる一筋き流る一筋ありいれお神田山神の柙系よりあり
なり 中畧 此あり 河城塔のめぐりを流して本町へ流るは流る橋あり

後せうとせよ中も皆なま橋ありと名もあはれ橋ともあり流るは
流るも入心後かゝるの帝をとり日本へ勅使する數百人の唐人江戸
より一筋よりあつるをいふ一筋ありと名もあはれ橋ともあり流るは
とより船子を集めぬよ此流のあつるを名を船子橋と名付たり
の並ぬと船子屋のちりよ橋一つありと名を船子橋と名付たり
の町を船子町と名付

井の水は塩さへ入万民をさげくろを憐みおひ神田山神の
あまの木の町へ流る山王山神の流るを南の町へ流るは二筋を江戸
町へあまのねくとありあり

虎の御門より愛宕の辺田地ありと名 野上橋の本より本あり梅田へ
いひ田の神のあつるをさつる川といひ一今の源助橋は時ありとて
張りつるとうわ云々

江戸町繁昌板勅進能毎月毎日ありと名あり
一能事ありといふ一町ありありといふは流るはあまの流るをさつるは毎月
毎日初を能事といふ人あり一万華樂の遊舞ふ事命一延年を喜ひあり
江戸町より大谷草人といふありの居風呂といふありのをさつるあり

貝岡集小齋臨海と名あり親世を湯あり天神神田明神貝塚山王権現
梅田山王ありと名ありと名ありと名ありと名ありと名ありと名あり

常川自集あつた身小梓以しづまをりり縁盛りりあがりり今も来く小紋見の
書袋万部といふ語を初はり以も実小番の御代の一盛事ある下

○好古日録云信小云若挑灯てんハ豊后公の時始て製以上下をある若を以もす

編ありり板を用もつりハ長以も後のりりと云ん天正の初の挑灯ハ麓ハ紙を

粘ねりり用もつり男山安居の頭の屋に用もつり若もくも透製あり手若共も若

車中重ある合籠ふもとつたりてりありてり製造以りあり
挑灯のりハ山家の
博量集ハ

○二重縁始り本邦ハ海り来りハハ爾後のり以りてり泉州の縁の縁ハ

後ハ替者中小語といふの浮弘といふ世上といふ一般ハ来るべし

久和寛の頃ありべし○泉及博の縁屋ハ安小西清長清明人小

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

若もくも男の取つき替換くさるき大小判或ハ軍取若人ハ前若く

向く掃き 此の刀を指又槍をのり女らよき人とかんるが髪をさすをたて
 りけ髪を衣のゆふ忌込よふ家うらぎ 一り幸の男の帯幅と同じ
 常の女の髪を眉の上ふある夜ふかく着さぬ子着るの髪たすハ
 おさげ地くおねて襟の境ふあり首飾の類とてや 衣後うらぎ
 の衣襟袖さぬくあれとら 一襟のるふ花をわりの上忌横筋を
 細く色くくおて色男色替り 一りゆふ小紋付るも見ぬこれハ
 練緯 今言髪 目 又襟るも有べ 一襟の女ハ改ふりありおあく長柄の傘を
 携き又い色くの指を懐合る袋を肩より足も衣後の横筋たのり
 又女の着る市女道のゆふうらぎ布を二布合て纏るるを後のうらぎ
 尻下まてゆふうらぎあり又ゆふ帯をさの下の敷のたふ肩のうらぎ
 さげるるもゆふ帯帽子をうらぎるるもあり又男の肩衣襟換ひび

あく小神のゆくき合て忌級雨のゆふ横筋を降る昔ハ武士ハ又之
 総髪若老人あどゆい殊下り女 天和貞享の以までもきく有る
 髪後も進く見ぬ又髪せし髪くもあり

元和元年乙卯

六月四 七月十三日改元

おのひめ 古田姫鶴神社建立 まる ○六月十一日古田城跡正年 一改六年 庚申上辰

○六月十八日山中津新御社 練物始まる津城内へ入る 大伴る町を敷け 新の町もけけ既ハ
 あり 一りゆふ帯金着るゆふ帯身協町正張新の實を衣付地帯をゆふ帯と
 び地の上履まも春日の鳥より 山を移す 一附属ありてゆふ帯小祀るる

○小石川白山権現社勸請身着地へ今も津殿海の内あり 一りを後
 兼勢ふゆふ帯の地へ移る

同二年丙辰

新田明神社新田橋より湯島へ移る ○藤七明神社法門部より今の

西へうらうら〇二月三日辰刻前川村親方と幸吉は基井他の子を親世者
候りしう十倍一丈八尺の彩佛を造り胎中納む〇二月九日甚重
預ひ守傾城町の場而一筆研小中しゆ

〇十月廿四日堀割兼提を譲せし〇麻疹流行

〇朝鮮人逮捕〇羅山先生丙辰紀行感

けまの大地の目人小渡まゝ余も多りのりおあも人のいりあう小男女群集まゝゆまの候あや
もあくらんえりくえくとあり候事あつ親世をいりあふ志承ふりて三百十餘年の
昔ありんあ時の勢恩乃信あつるあふ一幸海合考ふ寛永の以まそ今の並木町の
松並木ありありいりあつり本殿山の後際まゝ葦一面小池あり谷あて一暇ふんを
うん肉小懸たふありとあふ又寛永の以並木
橋ありありて遊観のころとせりゆりひつて

元和三年 丁巳

正月十四日光畑山天徳寺焼亡〇井田内智君と情隨毛流下谷池の場へ
うらうら〇春月正午動るの後をあらとり火起り堂焼焼亡

は附又像畑中を焼あひ
〇朝鮮素貞記感一冊羅山先生編之又寛永三年の

編あり〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

暮庭町の末いとはむ翌年十一月普請候りて鋪を築き高臺をそり

大坂町東町新町並み〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

とてそあつり小揚屋町と号し裁布とも敷をいり接町をり能あぬぬの翁を

いりつてきぬのあをひりて毎のいりつて

〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

〇尾司甚重〇官海を海遊女庵をいり

元和四年戊午 二月間

二月 濟之河堤立あり 今の窪部郡の ○日本橋津再興

○河堤の辺より火火標田迄焼爰 ○十月宮の刻長雲が 慧果が

○月白石初堂津再建十一面觀世音を安んずる東雲山に長谷と

あらしむ 中真宗山秀 兼修心あり

同又 年 己未

夏より冬へおとりの夜白氣を東南の角の如く長敷十丈又 慧果と云ふありて火火の如く

○又月より八月まで大旱又穀也い人をも多く死に

○大坂津を書始 ○長谷川忠孝と云ふの為人保八幡又境内の 時の鐘を刻後文室中甚切趣しく稱 ○九月十二日櫻宮と先け年

九十九門人林道春先けのりも史あり名波及田舎に云 麦系得菴松永昌三宅寄 齊よりの世小治

同六年庚申 十二月間

後醍醐山普門院陽田川の辺より飛戸村へ移る ○二月十日後友 代

光孝の年 九十二 ○十月二日僧と中真親智國作入寂 七十七歳

○廣平河原始りて遷 ○日本橋を築せしむ 其除のち小築せしむ ちり日廿十殿の法度

世多竹ありおまゝのち小治のちつるを或入 日教六十殿日ありおまゝのちつるを或入

同七年 辛酉

二月親世と文一代能真行を攝新末洋

○九月廿二日小塔遠州度と京後段と府友を建ふるの儀とて津家 川の舟より酒舟と云ふと送るも一返り

為り来んと云ふ。もわし一人をさしむる世のさしむるあり

○十二月十二日織田有樂斎卒

七十才恒居の町をえ敷許屋町と云
今小あり有る恒居あり一あり

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇靈

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に軍を遣下向あり正紀行を定む海邊記とあり

十一月十六日

源通村に軍を遣下向あり正紀行を定む海邊記とあり

同九年癸亥 八月間

正月明の夜遠澤郡就邑徐動源軍と小親を遣すの事云々

歌を掲ぐる○正月八日智恵白道懐遠意上人寂七十に才と人正世の始を
の事特あり信人等云々

○十一月十六日幕所作本因坊日海寂六十に才と人正世の始を
一書下り正月とあり

世年間記事

女奇形妓を捕せしれ男奇形妓とあり女奇形とあり男奇形とあり
奇形とあり奇形とあり

○本年一月より葛西まで皆道一々一二三に又の標を掛

寛永元年甲子 二月晦日改元

停勢停難宮より長官おに市太神を江戸日本橋通二丁目

おろふ同十年ふりふり人の地代地 近所あり

○長徳法中靈愛を感へ永代高小八幡宮を勧進を同八年再

無あり ○貝島村正初堂の再建 ○浮西把孫西後系

○東叡山寛永永寺御建立園山慈眼大原あり 幸海合考は地は後堂寺殿の地を考附あり一西より一

後堂寺の地は後堂の寺あり一後堂殿をさくくと後堂寺と云ふを思ふくと後堂のみ唱へて一水くこの地の名をなれりともり小幡照清社に今の東叡山の辺あり一を以て今の地を稱する又比叡山坂中の名をうりて入道村の町を坂中町と号す

○道平山靈巖の宗創 は時今云々巖高の地之権管又巖上人也かを以て地邊を奉法く建立あり一在り

○明志が助寄お撰と号し一にの岩地町あり晴天六日具行 角力の地あり一古今

○二月十八日より中橋より於て中村勸之助奇為娘と号 中橋より於て中村勸之助奇為娘と号

始より具行 建ありあり一と云

○十月十五日小柄永徳社現社改の廟より於ての二字現は一日あり 此の廟は田舎の廟なり

元和三年丁巳五月池永徳寺の人の記に小中橋より於て云々とあり一の寺あり一事を以ての勸之助奇娘の若より其居りせりの獨ありあり一と云えり

○十二月朝鮮人來聘 正使通政を文鄭立副使通判を姜弘重派奉率強梁

寛永二年乙丑

陽島小幡禪院創 軍山若妙の渭川劉和尚この時ハ報恩山天派と云寛永十一年癸丑九月十日述云あり後二位禪院に開り大師と号す

○南八丁堀一丁目永寺 稻荷社六斎社あり 此を以て寺小町御建

○北八丁堀一丁目永寺の春橋社八幡宮のあり 此社を稱し

○八月詣社二堀大工の 此を以て寺小町御建

幅一尺寺小町 此を以て寺小町御建

同乙丑 丙寅 四月

○尾戸天満宮鎮 寛永二年より今の西へ移りなり社改

○四月より八月に法皇昇殿 ○二条河原御所在書始り

○耶養宗再獲 ○九月上野小

○神祖神宮神速立 高野山にありは建武のころ武吉を本殿山の
深野山にありは建武のころ今高野山にあり

○十月吉原八町のあり 今高野山にあり

○武吉志料 武吉志料は武吉志料を引て實永二年十一月十日鳥丸大納言
の如東兵衛一を長野を引て武吉志料を引て武吉志料を引て武吉志料を引て

武吉志料を引て武吉志料を引て武吉志料を引て武吉志料を引て

○武吉志料 武吉志料を引て武吉志料を引て武吉志料を引て武吉志料を引て

○光慶に中向の序 光慶に中向の序は光慶に中向の序は光慶に中向の序は光慶に中向の序は

○あるを見 あるを見はあるを見はあるを見はあるを見はあるを見はあるを見は

○事 事を引て事を引て事を引て事を引て事を引て事を引て事を引て事を引て

○ま まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

寛永二年 丁卯

○二月源通村に神下向あり 源通村に神下向あり

○東叡山仁王門常 東叡山仁王門常は東叡山仁王門常は東叡山仁王門常は東叡山仁王門常は

○八月八日 八月八日は八月八日は八月八日は八月八日は八月八日は八月八日は

○大地震 ○十一月塔 大地震は大地震は大地震は大地震は大地震は大地震は大地震は

○同又年 同又年は同又年は同又年は同又年は同又年は同又年は同又年は

○正月二日 正月二日は正月二日は正月二日は正月二日は正月二日は正月二日は正月二日は

○河系弘法 河系弘法は河系弘法は河系弘法は河系弘法は河系弘法は河系弘法は河系弘法は

○名 名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は名は

○正月廿日 柗宮小於之御連舟會あり

足利城に連舟會ありありと
兼之徳日未十一日ありあり

○五月廿二日入道正覺寺開山慶育禪師寂

三夜忌禱ありあり一人たりあり
百二十七日小御さきありあり

○一乃流小野派劍術祖小野次郎右衛門率去

惣力の人ありて孫子上曲指ありあり
上総小野くま一房傳友一乃流

孝子後流小野一乃流又
の氏と流て小野と改めり

○十二月十日官送今大踏道之率 ハ十三日

○所く辻斬り ○十二月家後池元

医師を連舟をよみ 室東へゆりて管町三丁目

小居以

室東下向の記ありて時の句 おきし時、おころえしは室東の靈
○江戸ありて室東を拝みし事この人小居まり

寛永六年 己巳 二月 閏

六月上旬より同里村不初を流於流就たりとありて像并

江戸中老より男女群集以 ○七月廿七日玉室澤庵の土俵を

流さるは菴ハ羽衣上の山玉室ハ突刃掛金之籠く 玉室の法嗣正隆
大徳寺小居世の

像并ありて玉室は月流菴の二所流罪せりるべりり一ふありて江戸ハあり
らま玉室は菴支那をあらがさる下所大田系より二所よりきて突刃の土俵并流く

は菴原一偶を
りく別を告て曰

天分南北両鳧飛 何日舊栖同翼帰 聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉室額を和て云

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手帰 水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日は菴完上小居以

完上川中流并月も流さきてありて浮世不すむひもあは菴

あひまきあこよひの月をみちのこのあまの松のつげよんらん 全

二所流罪のみくありては菴和向の儀をみる
あるべしこの時 仙洞の内より并

るくありて海の流も玉の室もあらきてのつげよんらん 月

けころ民名の相尋小

江戸味噌を二まのすりて一まのひみそをまろりのころ江戸

○今年より武家くこけ書を定る場も少くして辻斬あり一旅こそ

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚の志す一社押あつらひきまゝをもむ首一もむ 持杖者位

○二月十日日醫所甲斐池奉奉 百十七やうのふきのあて後り一や作
夏武彦のるをまゝあつらひたりこの

○二月小湊誕生寺あり一布引祖作
徳平一後十六清と吸あつきりふ
と名昔述の医少を梅花寺に産ま

像身は事まきうつら ○二月二日身丈人遠く日還池と奉門志

日樹字字端日樹伝及版田不配流 ○六月琉球人來碇

○同廿二日大地震毛降 ○八月山王社法造管

○魚籃觀世喜之田の地小安直以 年山法堂上人を奉のま
とる勢(きり)西とりか

○十二月廿三日大地震成刻光為飛行一々事とまきうり

同八年 辛未 十月國

三月十九日江戸中不所降 ○同廿日諸皇耳露降

○二月二日淡路中火之上 ○去年より今年も六十尺波癖病

む老多一 ○東叡山小大佛像 造立あり 妙集炭泥を粘くそのゆじ
ことと造くゆらる後年地を

清水親善中管速 ○八月大風家屋を壊ち樹木

を折す ○十月天降 ○十月十二日後夜氏不代池無事 八十ヤ

○十月十七日上野大名焼落 依る大橋売勝之と
彫り言一丈八尺余

同九年 壬申

諸家深秘録も今年より奥只仙臺の茶穀始り江戸(と)今
江戸(と)今奥只仙臺の茶穀始り江戸(と)今

○中村勅之舞今の入形居申搦より称宣町今の入形移り

○菅廬菅の廬新法云 寛明日元寛永九年の件今の入形矣今つる月銘年

女體今の入形やあまの心初より二十女の内外と見えたり

○玉室玉室澤居二所今の入形瀧處より召還しあひ七月廿七日の府より

非田の廣徳より不今の入形寫以六の冬澤居の跡込氏不寄居を翌年

二所を大徳子降せしめあり今の入形 以居所寛永十三年麻布小島居あり
以居所を願く檢束庵より

寛永十年 癸酉

上野忍今の入形う忍林道春先生今の入形別荘先聖殿を建今の入形し

○正月廿一日廿二日諸國大地震小田原今の入形の
別荘今の入形より同廿六日申刻大地震

○武州忍の憐濟番城とありし今年松平直州今の入形居あり

面く江戸一帯宅地をぬきし一帯を忍系亦忍町とよみ

○二月より六月まで波あり今の入形 ○南信守町と丁目の水川を掘り町を

せしむ今の入形 ○都内芝居は先ありて真行今の入形に今の入形

同十一年 甲戌 七月間

正月十八日増上寺より上人念佛今の入形三昧今の入形より今の入形歸終今の入形あり安奈具今の入形の後

身骨今の入形寒く舍利今の入形とあり今の入形 ○二月二日 濟城今の入形より今の入形濟能今の入形芝居町人

津國をぬきしとよ青羽を揚今の入形しは是より始りけり今の入形 或記今の入形より

見えたり今の入形 ○二月九日お基原大徳宮今の入形桂今の入形奉今の入形 八十七

○二月十九日お白雲月を貫く今の入形 ○壬子今の入形禮觀社 其今の入形非明今の入形文

西久保八幡文 同忠正勅堂今の入形寺今の入形津造今の入形堂あり今の入形 徳也山今の入形再今の入形建今の入形たり

○品川おあき奉堂今の入形に重徳二王門今の入形は再建

洋ありの事 梅子ゆり
さき世より 梅あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白藤任統副使東濱令世深
從事青丘英床 張服本抄古く

武江年表卷之一 畢

